柏戸の真実 ④

史上最年少大関（上）

さあ次は横綱だ！

本来24日に初日を迎えるはずだった大相撲夏場所は、2週間遅らせた上でのものだった。しかしコロナ禍には勝てず中止になった。新型コロナウイルス感染症のため28歳で亡くなった勝武士（高田川部屋）は糖尿病の持病があった。

柏戸は横綱昇進後、糖尿病を発症、インスリンを打ちながらの土俵が長く続いた。平成8（1996）年、58歳の若さで亡くなったのはその影響があったのは明らかだった。体を大きくしようと過度に栄養分・糖分を取ると糖尿病を引き起こす。力士にとって今も昔も厄介な病気だ。

新大関朝乃山（高砂部屋）のお披露目も7月に延びた。無観客という変則的な大阪とは引退しかない」という面もあって、儀式に関しても厳かさに加え、厳しさのようなものも伝わってくるのと違って新鮮度が高い。

35年名古屋で昇進

柏戸の大関昇進は昭和35（1960）年名古屋場所後。この時点で「21歳史上最年少大関昇進」と盛り上がった。詳しくは21歳8カ月だが、それまでは照国、千代の山の22歳が最年少。柏戸の昇進をマスコミが「1歳」刻みで表したあたり、記録面ではおおらかな時代だった。その後大鵬（20歳5カ月）に超され、北の湖は20歳7カ月。貴乃花（二代目）は20歳5カ月だった。

大関昇進時の盛り上がりは特筆され、夏巡業では鶴岡に凱旋帰郷した。7月27日夜、日中は東根市で巡業があって終了後、臨時の相撲列車で鶴岡駅に到着した。

鶴岡凱旋に5万人

荘内日報はこう伝えた。

「この日の人出5万人。列車がホームに滑り込む1時間前から駅前通りロータリーは1万数千人で埋め尽くされた。やがて若乃花、大鵬などの人気力士が改札口付近に姿を現すと、子どもたちの歓声が上がったが、・春場所を11勝を挙げる好成績で最近3場所を32勝。基準（33勝）には1勝足りなかったが、異論はなかった。近大出身で26歳の大関誕生だった。

大関昇進は「さあ次は横綱だ！」とさらなる高みを目指そうと勢いがあって盛り上がる。横綱昇進が「あ

荘内日報

昭和35年7月29日（金曜日）

新大関柏戸バンザイ

前夜祭に五萬人

天気予報

十七日夜オープンカー上の柏戸

二十八日郷乃花と申し合い（右）

二十八日郷大山ぜん地を訪ね

凱旋を伝える本紙。翌朝28日の稽古風景も伝えた（昭和35年7月29日付）

柏戸が降り立つと、われ先に見ようとする人たちで警備中の警官もてんてこ舞い。8時すぎ、駅長室から改札口に出て、花束を贈られたが、大群衆にもまれ、わずか10㍍離れたオープンカーにたどり着くまで数分かかるほどの人垣であった。車は寄せ来る人波を押し分けて、駅前から日和町、荒町、銀座通り、南銀座、七日町、上肴町と続けられた。目抜き通りはいずれも人の波。オープンカーについてゾロゾロ歩く人たちなどで交通は完全にストップ。花火も打ち上げられた。この日先導を務めた鶴岡南、鶴岡工業の両高校合同の吹奏楽団も立派な出来栄え。マーチを吹奏しながら全コースを行進した」と描いた。今は旧町名となった市街地を約2・7キロ、祝賀会となった料亭「新茶屋」までのパレードは真夏の夜祭りのようだった。

柏戸は昭和29年、鶴岡南高定時制を1年中退して角界入り。当時16歳直前だった。それから3年で十両昇進し、幕内は4年目、そして6年目で大関昇進だからスピード出世が分かる。

相撲経験者ではなかったが1㍍88の長身から立ち合いから攻めた。突っ張りから右四つになって猛然と寄っていく取り口は「角界のサラブレッド」の異名があった。やや腰高だが、相手のことを構わず、とにかく速攻で左のノド輪も豪快に攻めた。荒々しさはあっても若者らしい、さっそうとした取り口が人気を呼んだ。

鶴岡に凱旋した柏戸が乗ったジープ型のオープンカーは大歓声で迎えられた

大鵬と違う昇進理由

1つ前の「栃若時代」は栃錦が「まむし」「業師」と言われ、絡みつくような四つ相撲だった。若乃花は「土俵の鬼」。仏壇返しと言われる、叩き付けるような投げ技「呼び戻し」があった。2人の対決は長い時間の攻防がまた見どころだった。それとは違う「柏鵬新時代」はいずれも足長の長身力士の台頭。高度経済成長に乗った戦後の新たな時代を告げる気分もあった。

ただ柏戸の大関昇進に関しては大鵬とは違う別の大きな理由があった。

＝敬称略＝

（富樫　嘉美）

毎週火曜日付に掲載